

海外移住女性における母子関係についての考察

中国朝鮮族の移住母の事例を中心に

XU JIE (神戸大学)

1. 本発表の背景

1.1 トランスナショナリズムと移住の女性化

今日、人々の国境を越える移動は非常に頻繁になった。グローバルな時代において、国家は徐々に人々を制限する境界ではなく、広範な移住を生み出す場となっている。一層容易になった国際移住は、個人に成功の機会やより良い人生を営む可能性を多く提供した。しかし、同時に、可能性や機会の増加は、その分不安定と脆弱性を伴うということは否めない[Benería, Deere & Kabeer 2012:5]。

1960年代ごろから本格的に始まった移民研究は、初期の農村-都市間移動研究段階から、1970年分断と定住に焦点を当てた研究段階を経て、1980年代以降、より一時的で反復的な移動行為、そして人々が故郷と定住先との広いつながりを作り維持する現象に注目するトランスナショナルな視点で活発に進められてきた[ブレンダ・ヨ 2007:149]。

トランスナショナルな観点から見ると、国際移住労働者は海外の労働市場という物理的な場所に属しつつも出身地との諸関係を持続していくトランスナショナルな行為者であり、分析の対象は移民労働者にとどまらず、彼らと関係を持つ非移民も含まれる。その中でも、母国の家族は、移住者と密接な関係を持つネットワークとして特に注目されており、移住の意思決定や移住過程、移住先での適応など、移住行為全般において家族の役割や関係性に着目した研究が盛んに行われている。

では、移住研究において女性が登場する背景は何だったのか。1970年初頭まで、国際移住研究においては男性の労働移住が議論の中心にあった。当時の移住領域に登場した女性は、主に移住主体である男性に付いて移住する存在、或いは家族再結合の目的で移住する副次的対象として議論されてきた。1980年以降、女性の独立移住や家族再統合を目的としない未婚女性の移住が増加し、移民研究の分野で女性が可視化され始めた[イ, ジョン(이지영) 2013:259]。この傾向は、拡大する新自由主義経済体制のもとでの女性の労働力需要とあいまって顕著になり、移住の女性化は重要な課題として移住移民研究領域に浮上してきた。

移住の女性化とは一次的には、国境を行き来する労働者の中に女性の数が急速に増加している現象を指す。女性移住労働者の数は増加の一途をたどり、2019年には全体の41.5%¹を示した。これは国際移動における「新規現象」や「女性の数的増加」ではない。注目に値するのは、典型的に「女性の仕事」として扱われ、厳密な意味での「労働」とは見なされなかった感情、性、ケア分野の労働に参加するため、女性が母国の家族を離れ、国境を超えているということである。私事化された「女性の仕事」のグローバルな市場化、商品化は、性別役割分業、ジェンダー規範の動揺を生み出すインパクトを持つ。

1.2 研究対象の概要

発表者が注目する中国朝鮮族社会もそうした移住の女性化現象が顕著化している。中国朝鮮族は

¹ 「ILO GLOBAL Estimates on International Migrant Workers- Result and Methodology」2021

中国の土着民族ではなく、朝鮮半島からの起源を持つ中国少数民族の一つである。中国内の朝鮮族は主に中国東北地域（黒龍省、遼寧省、吉林省）に集住している。最新の 2020 年中国国勢調査によると、中国朝鮮族の人口は 1,702,479 人で、中国の少数民族の中では 13 位を占めている。

1980 年代の韓国への親戚訪問を皮切りに、朝鮮族社会には大規模な国際出稼ぎ労働と結婚移民のブームが発生する。2000 年代になって、その数が幾何級数的に増加するにつれ中国東北地域を拠点とする朝鮮族民族共同体は急速な人口流失と過疎化状況に直面する。現在、中国朝鮮族全人口の約 3 分の 2 が²故郷を離れているといっても過言ではない。

また、経済の目的で海外に移住労働に参加する朝鮮族のうち、既婚女性の数はかなり多い [イ, ヘウン(이혜웅) 2006]。朝鮮族社会において女性の海外移住労働は一つの普遍的な現象として定着した。朝鮮族女性の海外移住経緯と移住地での労働様相を見ると、今日の世界的な争点である移住の女性化現象と一脈相通ずる。

発表者は朝鮮族海外出稼ぎ労働者の中でも、母国家族の中で重層的に絡み合った存在から、海外移住によって物理的に家族と切り離され、家族の大黒柱の役割を担うようになった母親（以下、移住母 (migrant mothers)）に焦点を当てる。究極的には、他国の女性労働者の送り出し事例との比較研究を通して、朝鮮族女性の海外移住労働と送り出し側のジェンダー構造との関係性を国際移住研究の文脈で考察することを目指している。しかし、本発表では、時間の制約もあり、前述のした研究の一部に焦点を絞る。具体的には、母親である移民労働者とその家族、特に子どもとの関係の側面に着目する。長期にわたる物理的な離散状況を克服し、母子関係を維持するためにどのような実践や戦略が用いられたのかについて、事例をもとに説明する。

2. 研究の結果

本内容は、2020 年 10 月から約 2 ヶ月間、中国延辺朝鮮族自治州現地を訪問し、海外移住労働経験を持つ朝鮮族女性とその家族に行ったインタビューと参与観察によって得られたデータを基に作成したものである。なお、インフォマントの基本情報は以下の通りである。

氏名	年齢	移住国	移住期間	子女	中国での 子育て担当	婚姻 状況
J さん	54 歳 (1967)	韓国	2000 年~2013 年 9 年 : 2 回帰国	男 1	夫の兄の妻 : 姉	既婚
H さん	38 歳 (1983)	韓国	2012 年~2019 年 7 年 : 多数の短期帰国	女 1 男 1	夫の母	既婚
M さん	54 歳 (1967)	日本	2002 年~2013 年 12 年 : 途中帰国なし	女 1	姉	死別
K さん	42 歳 (1979)	韓国	2007 年~2012 年 6 年 : 5 回の帰国	女 1 男 1	夫の母	既婚
Y さん	50 歳 (1963)	韓 ; 日	2002 年~2008 年 7 年 : 3 回の帰国	女 1	弟の妻	離婚

2.1 送金

² 「朝鮮族は消えている」『東北アジア新聞』の 2017 年 9 月 1 日版

海外出稼ぎ労働をする母親としての最も重要な実践について尋ねたところ、インフォーマントが最初に挙げたのは、故郷に残された子供の養育と教育の費用を送金することであった。海外労働市場で得た賃金を送金することは母親として、ひいては母子関係維持において最も核心的な実践である。

送金の用途は以下の通りである。まず、送金の大半は、国内で子供の養育を担当する親族に送られ、子どもの生活費・教育費に充てられる。また、移住母は子供に直接小遣いを送ったり、子供の成長段階に応じた必需品の調達に力を入れたりしており、移住母はこれを一次的養育者の役割を果たせない申し訳ない気持ちと母性愛の証として意味化していた。最後に、送金の一部は、国内で子どもの世話を引き受けた親族への直接的・間接的な金銭的補償として使われた。

2.2 遠距離コミュニケーション

インタビューを行った朝鮮族移住母たちは、移住労働の時期、移住国、在留資格、職種などの要因に違いがあり、それが移住母と母国の子どもとのコミュニケーションの方式、頻度、質にも違いを生んでいた。しかし、インタビューしたインフォーマントは、子どもとの遠距離コミュニケーションは、母子の物理的な分離を克服し、母親と子どもとの絆を継続するために不可欠な実践であることを共通して強調していた。

2002 年から 12 年間、日本で不法滞在を続けながら飲食店やカバン工場などで働いてきた Mさんは、不法滞在であったため子供とのコミュニケーションは非常に制限され、時には子供とのコミュニケーションのためには不法身分の露出(強制帰国の可能性がある)というリスクを負わなければならなかった事情について語ってくれた。

今はいつでもどこでもテレビ電話ができる時代だね。しかし、私は不法で日本にいったため、最初の5年間は、通話だけで、しかも自由にはできなかった。自分の携帯電話を持つことができなかったため。時々他人の携帯を借りて、中国に電話をかけるのが最善の方法だった。

でも手紙は結構送った。手紙の住所欄に自分の名前を書くと不法滞在がバレるかもしれないということを聞いたので、国内からの手紙の受取人の欄には知人の名前と住所を書き、後で受け取りに行ったりした。大きくなる子供の顔を覚えていられるよう、いつも姉が送ってくれた子供の写真を見た。辛い時は娘の写真を見。この子は私が食べさせていかなければならないという覚悟をしながら 12 年間耐えてきた。(Mさん)

また、合法的な在留資格を持つ移住母であっても、様々な制約から国内における子どもとのコミュニケーションが困難であった。Jさんは、2000年産業研修生として韓国に入国し、機械の部品工場で働いた当時を振り返り、息子が骨に染みるほど懐かしかったが、産業研修生の低くい賃金とは対照的な高い通信費、閉鎖的な職場環境と工場寮などの要因で自由な通話はできなかったと説明した。

今日、移住母たちの所得はかなり増加した。また、コミュニケーションにかかる費用が減少し、通信手段が急速に発展したため、母子は頻繁に連絡することができ、コミュニケーションの質も劇的に上昇した。移住母たちは、一層容易に使えるなった先進的な通信技術を活用して、子どもとの多様化したコミュニケーション方式をとり、海外移住で遮られた「伝統的な」母親領域の実行を試みる。

2.3 選択的な帰国

移住母母子関係のための実践は、移住国という一カ所だけで行われるものではない。彼女らは、子供が人生の重要な局面を迎えたときや子供が正常のケアを受けることができない状況にあるとき、選択的に帰国して主養育者の位置に戻る。インタビューしたインフォーマントが一時帰国を選択した具体的な要因を見ると、子どもの就学、入学、病気、思春期、子どもの逸脱、子どもと世話をする親族との不和、子どもを世話する親族の病気・出国などが挙げられる。そして、上述の一連の事情が一

段落し、親族が再び正常に子育てをしてくれる状況になった時、再び海外移住に出かけた。

2.4 代替の子育て

海外で出稼ぎ労働者であると同時に母親でもあるためには、親族からのサポートが不可欠である。母親は自分が不在する状況に直面し、主に母国にいる親しい女性親族に育児を任せた。

夫婦のうち母親だけが海外に出た場合、父親が子供の養育を全面的に引き受けることは非常に稀である(父親一人が海外に出た場合、母親が全ての養育の責任を負う場合が普通であることとは対照的)。父親が子育てに参加する場合でも、祖父母、特に祖母が主たる養育者となり、父親は二次的な養育者の役割を担うことが一般的である。

また、代替養育者の第一候補とされる祖母(母方祖母)が不在あるいは養育できない場合には、母親の姉や義理の姉が育児を引き継ぐケースが多い。このように、海外出稼ぎ女性労働者は、女性親族との協力関係を積極的に活用していた。

2.5 母子コミュニケーションの窓口

母子関係において親族が提供するサポートは、子育てにとどまらない。親族は、養育者の不在を補うだけでなく、母子が交流を続け、強い絆を維持するための仲介者でもある。

Mさんのケースから見ると、Mさんは娘が生後3ヶ月のとき海外へ出かけ、幼児期から12年間も子供と離れていた。それでも母子関係が断絶しなかったのは、母国で子どもの面倒を見ていたMさんの姉の助けが大きかった。電話と手紙だけが可能だった移住の初期、Mさんの姉は、子どもに母親の存在を認識させ、受け入れさせるために、意図的にMさんの写真を見せたりMさんの話を子供に聞かせたりした。また、あらゆる方法を動員して子供が母親に愛されていることを感じさせようと努めた。

また、長期的な空間的分離による心理的距離や疎外感から、母子は必然的にコミュニケーション上の困難に遭遇する。その度に母親は母国の親族を通じて、子どもの不満や困難を適時に把握し、子どもが必要とする関心や具体的な物的支援をすることで、母子間のミスコミュニケーションを緩和でき、より円滑な交流を続けたとインフォマントたちは説明した。

3. 結び

以上、海外出稼ぎ労働に参加する朝鮮族母親が母国の子供との関係を維持するために行う実践と戦略を概観した。しかし上記の内容は、さらに次のような疑問をそそる。なぜ、朝鮮族母親は海外で家計を扶養ながらも、子供の養育をめぐるさまざまな実践を続けなければならなかったのだろうか。これに対して、発表者は、支配的な影響力を持つ性別役割分業、つまり「男性は稼ぎ手で女性は家事・育児の担い手」とは異なる朝鮮族社会の性別役割分業(女性が経済扶養者と養育者二重の役割を担う)が、前述のような移住母実践を促す仕組みとして作用しているとする。海外労働市場に置かれた母親が、自分に与えられた二重の役割と交渉しながらその役割に応えようとする試みが、母子関係をめぐる諸実践から現れるのである。

参考文献

- 伊豫谷登士翁 編 2007. 「女性化された移動と接続する場所」『移動から場所を問う一現代移民研究の課題』
イ, ジョン. (이지영) 2013. "국제 이주와 여성-세계화와 이주의 여성화" 『세계정치』
イ, ヘウン (이해웅) 2005. "한국 이주 경험을 통해 본 중국 조선족 기혼여성의 정체성 변화" 『여성학논집』
Benería, L, D.D. Carmen & K. Naila 2012. Gender and International Migration: Globalization, Development, and Governance. *Feminist Economics* 18(2): 1-33.